

本文⁷⁾

本稿ではこのうち右振り仮名のみを扱い、題目、割書き、左振り仮名は省く。漢文訓読は右振り仮名に含めた。

1. 種類数

まずは、資料ごとの字体の種類数と、それらの具体的な字体をみていく。

表1によれば、振り仮名の字体の種類数は、月氷奇縁73、弓張月72、八犬伝71のように70台前半であり、本文での種類数が月氷奇縁106、弓張月103、八犬伝92に対であるのに比べるとその約7割で、20~30種類も少ない。振り仮名の字体の種類幅は本文よりも狭いことが分かる。

複数の字体が使用される仮名の数をみると、本文には二種類以上の字体が使用される仮名が30以上はあるのに対し、振り仮名は21~23しかない。いろは四十七に「ん」を足した48の仮名において、一種類の字体しか用いない仮名は、本文が約三割なのに対して、振り仮名ではその二倍の約六割程度もみられるのである。一つの仮名に一種類を基本として、種類を限定している。

具体的な字体は次のとおりである。

○三本に共通して見られる仮名字体
一字体 (34)

【あ】【い】【う】【え】【お】【り】【き】【こ】

【さ】【せ】【そ】【ち】【つ】【て】【か】【ぬ】
【の】【ひ】【ふ】【へ】【や】【ま】【と】【む】
【め】【り】【よ】【れ】【ろ】【じ】【み】【系】
【を】【ん】

二字体 (14)

【く】【く】 【け】【け】 【し】【あ】
【も】【す】 【あ】【た】 【と】【と】
【よ】【ふ】 【ね】【み】 【た】【ん】
【や】【や】 【ゆ】【ゆ】 【ら】【ら】
【り】【り】 【る】【る】

○月氷奇縁と弓張月の二本に共通

【せ】【せ】 【む】⁸⁾ 【あ】

○月氷奇縁と八犬伝の二本に共通

【れ】【つ】

○弓張月と八犬伝の二本に共通

【し】【ま】【み】

○月氷奇縁のみ

【ん】【あ】【お】【ほ】

○弓張月のみ

【あ】【も】

○八犬伝のみ

【か】【あ】【あ】

三本に共通する字体は、振り仮名において48すべての仮名に認められ、しかも、これらすべての字体は読本本文にも共通して使用される。本文には使用される画数の多い字体、例えば【あ】【そ】等ではなく、また、漢字に近い字体の使用は【ん】【あ】ぐらいで、画数が少なく単純な形の字体が主として用いられている。本文には用いられない、振り仮名独自の字体はない⁹⁾ことから、これらが馬琴読本における基本的な字体であるといえる。

二本に共通する字体

表1 ひとつの仮名に対しあてられる字体の種類数の分類

	一種類	二種類	三種類	四種類	五種類	合計	二種類以上ある仮名
月氷奇縁 振り仮名	25	21	2	0	0	73	23
樞説弓張月 振り仮名	27	18	3	0	0	72	21
南総里見八犬伝 振り仮名	27	19	2	0	0	71	21
月氷奇縁 本文	12	21	9	5	1	106	36
樞説弓張月 本文	15	19	9	2	3	103	33
南総里見八犬伝 本文	17	22	6	2	1	92	31

【𠄎】【つ】【よ】、一本にしかみられなかった字体【か】は、本文には三本に共通して用いられる。このうち【か】や【𠄎】は、汎用の【う】【き】に対し【か】が語頭、【𠄎】が語中末に使用され、自立語の位置・切れ目を示す書記機能があるといわれ、本文にもそうした使用傾向がみられた¹⁰⁾。振り仮名は漢字に付され、語の切れ目を字体によって区別する必要がないため、【か】【𠄎】は振り仮名に必ず使う字体ではなかったと推測される。

本文と大きく異なる字体は【す】である。振り仮名には三本とも【す】が使用されているのに対し、本文では弓張月のみに使用されていた。他で注目されるのは、二本共通の〈ホ〉の【ほ】【𠄎】である。月氷音縁や弓張月では本文にも振り仮名にもみられるが、草双紙には滅多に使用されない。

以上のように、振り仮名は本文に比べて種類数が少なく、一種類のみ字体が与えられる仮名が半数以上にも及ぶ。単純な形の字体が使われ、予測していた通り、種類の上で整理がなされていたといえる。字体の選択には本文とは別個の性格が窺われる一方、振り仮名の簡易さは、本文に【ほ】【𠄎】が使用されている読本には振り仮名にもその字体が使用されているように、主として読本本文を中心とした字体の選択と整理であったと考えられる。

2. 使用数と使用傾向

変体仮名の種類として明確に区別できるのは、字母違いの字体である。そこで、字母違いの字体を複数持ち、かつ三本の読本に共通していた字体の使用数と、使

用傾向を概観していく。該当する仮名は〈ケ〉〈シ〉〈ス〉〈タ〉〈ネ〉〈ハ〉〈リ〉の七つである。表2に、資料別および振り仮名と本文別に、それらの字体ごとの使用数と割合を示した。

使用傾向を分類すると、①使用数の多い字体・少数の字体で分かれる仮名、②資料によって使用割合にばらつきのある仮名、③一本に独自の使用傾向を持つ仮名の三分類にできる。その分類に該当する仮名・字体を次に示す。また、本文の同じ仮名・字体がどの分類にあたるのか、後に示した。

振り仮名

①使用数の多い字体・少数の字体で分かれる仮名(波線を引いた字体が少数の字体)

〈ケ〉【け】【𠄎】 〈シ〉【し】【𠄎】

〈タ〉【た】【た】 〈リ〉【り】【𠄎】

②資料によって使用割合にばらつきのある仮名

〈ス〉【も】【す】 〈ハ〉【そ】【ハ】

③一本に独自の使用傾向を持つ仮名

〈ネ〉【ね】【ひ】

本文

①使用数の多い字体・少数の字体で分かれるもの(波線を引いた字体が少数の字体)

〈シ〉【し】【𠄎】 〈ハ〉【そ】【ハ】

〈リ〉【り】【𠄎】

②資料によって使用割合にばらつきのある仮名

なし

③一本に独自の使用傾向を持つ仮名

〈ケ〉【け】【𠄎】 〈ス〉【も】【す】

〈タ〉【た】【た】 〈ネ〉【ね】【ひ】

表2 <ケ><シ><ス><タ><ネ><ハ><リ>使用数と割合

ケ	け	レ	ろ	シ	し	ス	す	タ	た	ネ	ね	ハ	は	リ	り	リ	り
月氷音縁 振り仮名	80 74.07%	28 25.92%	0	月氷音縁 振り仮名	276 65.40%	145 34.36%	0	月氷音縁 振り仮名	98 79.67%	25 20.32%	0	0	0	月氷音縁 振り仮名	158 94.04%	10 5.95%	0
弓張月 振り仮名	104 79.38%	27 20.61%	0	弓張月 振り仮名	271 65.45%	135 32.60%	8 1.93%	弓張月 振り仮名	18 13.43%	116 86.56%	0	0	0	弓張月 振り仮名	133 93.66%	9 6.33%	0
八犬伝 振り仮名	150 96.15%	6 3.84%	0	八犬伝 振り仮名	352 60.68%	193 33.27%	35 6.03%	八犬伝 振り仮名	132 99.24%	1 0.75%	0	0	0	八犬伝 振り仮名	246 96.09%	10 3.90%	0
月氷音縁 本文	29 69.04%	13 30.95%	0	月氷音縁 本文	238 84.09%	45 15.90%	0	月氷音縁 本文	106 74.12%	35 22.37%	2 1.39%	0	0	月氷音縁 本文	163 84.45%	30 15.54%	0
弓張月 本文	20 25.64%	52 66.66%	6 7.69%	弓張月 本文	344 80.34%	50 11.68%	34 7.94%	弓張月 本文	149 86.12%	9 5.20%	15 8.67%	0	0	弓張月 本文	312 94.25%	19 5.74%	0
八犬伝 本文	63 69.23%	28 30.76%	0	八犬伝 本文	298 77.80%	30 7.83%	55 14.36%	八犬伝 本文	128 74.41%	0	44 25.58%	0	0	八犬伝 本文	117 95.12%	6 4.87%	0
月氷音縁 振り仮名	27 54%	23 46%	0	月氷音縁 振り仮名	81 37.85%	133 62.14%	0	0	0	0	0	0	月氷音縁 振り仮名	158 94.04%	10 5.95%	0	
弓張月 振り仮名	25 51.02%	24 48.97%	0	弓張月 振り仮名	103 54.21%	87 45.78%	0	0	0	0	0	0	弓張月 振り仮名	133 93.66%	9 6.33%	0	
八犬伝 振り仮名	22 18.64%	97 82.20%	0	八犬伝 振り仮名	190 60.50%	124 39.49%	0	0	0	0	0	0	八犬伝 振り仮名	246 96.09%	10 3.90%	0	
月氷音縁 本文	7 87.50%	1 12.50%	0	月氷音縁 本文	36 16.36%	167 75.90%	16 7.27%	1 0.45%	0	0	0	0	月氷音縁 本文	163 84.45%	30 15.54%	0	
弓張月 本文	6 85.71%	1 14.28%	0	弓張月 本文	35 8.86%	347 87.84%	13 3.29%	0	0	0	0	0	弓張月 本文	312 94.25%	19 5.74%	0	
八犬伝 本文	2 15.38%	6 46.15%	5 38.46%	八犬伝 本文	28 7.10%	357 90.60%	8 2.03%	0	1 0.25%	0	0	0	八犬伝 本文	302 98.37%	5 1.62%	0	

振り仮名と本文とで使用傾向が共通しているのは使用数の多い字体・少数の字体で分かれる<シ><リ>と、一本のみ独自の使用傾向を持つ<ネ>だけであり、振り仮名と本文とでは、使用傾向が必ずしも同じとはいえない。

まずは、使用数の多い字体・少数の字体で分かれる仮名をみてみる。振り仮名と本文とで共通の使用傾向だった<シ>は【**あ**】が少数の字体であり、振り仮名では約33～35%、本文には約8～16%の割合で使用される。また、<リ>は【**う**】が少数の字体であり、振り仮名に約4～6%、本文に約2～16%の割合で使用される。【**あ**】【**う**】ともに本文に比して振り仮名の方が、資料による使用割合の幅が狭く、ほぼ一定しているといえる。

次に<ケ><タ>をみてみる。<ケ>は【**ろ**】が少数の字体であるが、月氷音縁が約26%、弓張月が約21%なのに対して、八犬伝は約4%と非常に少ない。<タ>は【**た**】が少数の字体で、弓張月・八犬伝の使用割合が約1%、月氷音縁に約10%

の使用がみられる。このように、<ケ>の【**ろ**】は弓張月本文の使用割合が偏っていたり、<タ>は字体の使用割合が月氷音縁本文のみ異なっていたりと、少数字体という全体的な傾向は共通していても、本文には個別の違いが現れる。

作品によって、振り仮名に使用割合の違いがみられるのは<ス>である。月氷音縁には【**そ**】が主に使用され、【**す**】は約20%の使用割合である。それとは正反対に、弓張月では【**す**】が優勢であり、【**そ**】は約13%の割合と少数の字体である。八犬伝で【**す**】は僅か1例であり、ほとんど【**そ**】で書かれている。共通の傾向はみえない。

<ハ>も使用傾向にばらつきがあり、月氷音縁では【**は**】が多く、弓張月・八犬伝では【**え**】がやや多めと、微妙な違いがある。ただし、本文に対し【**え**】の使用割合が多いのは振り仮名に共通している。

一本のみ使用傾向が異なる<ネ>は月氷音縁・弓張月の振り仮名では【**ね**】【**ぬ**】の使用割合がほぼ同等であり、八犬伝の振り仮名では、【**ぬ**】の使用割合がか

なり多くなる。八犬伝本文では【ね】【ひ】のほかに漢字に近い字体の【祢】もみられ、本文・振り仮名ともに八犬伝のみ独自性が窺える。

本文は、月氷奇縁の〈夕〉、弓張月の〈ケ〉〈ス〉、八犬伝の〈ネ〉のように、個別に特徴がみられることがある。それに対し、振り仮名は、〈ス〉のほかは、概ね使用傾向に共通する部分がある。

また、振り仮名と本文とで使用傾向が共通している〈シ〉〈リ〉〈ネ〉を含め、振り仮名と本文の使用数・使用傾向に少なからず異なりがあることが分かる。

3. 用字法

〈ケ〉〈シ〉〈ス〉〈夕〉〈ネ〉〈ハ〉〈リ〉の字体の用法の違いをみてみたい。その違いは、次の四つを挙げることができる。

- ①語の位置によって使用が偏る字体
〈シ〉〈夕〉〈ネ〉
- ②字音語に使用が偏る字体がある
〈ケ〉〈リ〉
- ③音韻による使い分けのある
〈ハ〉
- ④使用位置や音韻に違いがみえない
〈ス〉

まず①語の位置によって使用が偏る字体〈シ〉〈夕〉〈ネ〉について述べる。

〈シ〉【し】【あ】は、三本に共通して、【あ】が語頭専用、【し】は汎用である¹¹⁾。〈夕〉は【あ】が汎用、【た】が語頭に使用される。

〈ネ〉の【ね】【ひ】は表3の通り、【ね】が汎用、【ひ】が語中末という使い分けである。例えば「實兼」の「さね」の〈ネ〉は

【ひ】であり、「招き」等、語幹にあたる箇所まねの〈ネ〉は【ひ】が使用される。「一年」の下部要素頭「ねん」の〈ネ〉には【ね】を必ず使用する。このように、語の構成が意識された用字といえる。

表3 振り仮名の〈ネ〉

語末	語中	複合語 上語語末	複合語語頭 (準語頭)	語頭		
0	2	0	14	11	ね[27]	月氷奇縁
18	5	0	0	0	ひ[23]	
2	2	0	4	17	ね[25]	弓張月
15	7	2	0	0	ひ[24]	
1	1	0	5	15	ね[22]	八犬伝
83	12	2	0	0	ひ[97]	

②字音語に使用が偏る字体がある〈ケ〉〈リ〉に関して、表4・表5にそれぞれの字音語をまとめた。

〈ケ〉の【け】は、「属」^{あづけ}「成頼」^{しげより}「養狎ん」^{かひつけ}(月氷奇縁)、「身」^みの「丈」^{たけ}「幼き」^{いとけな}「即まぬらせ」^{つけ}(弓張月)、「避て」^{さげ}「持氏脚」^{もちうじけう}「援」^{たすけ}(八犬伝)など、和語・字音語の区別なく使われるのに対し、【れ】は弓張月に「今日」^{けふ}「嘲弄」^{あざけり}の和語に用いられる以外は、字音語に用いられている¹²⁾。表4によれば、【れ】は「ケン」「ゲン」「ケツ」「ゲツ」「ゲギ」「ケイ」「ケ」といった字音語素にほぼ限られていると分かる。

〈リ〉の【り】は、「林木」^{りんぼく}「政」^{まつりごと}「執」^{とり}(月氷奇縁)、「推量」^{おしはかり}「頼長公」^{よりながこう}「折しも」^{をり}(弓張月)、「潰」^{ぼとり}「頻にして」^{しきり}「憲実」^{のりさね}(八犬伝)など、和語・字音語、使用位置に関わりなく用いられる。それに対して、表5をみると【り】は「リヤウ」「リウ」「リヨ」「リヤク」「リヨク」「リン」「リツ」と、100%字音語素の表記に使用されている¹³⁾。拗音を中心とした字音語素に時折【り】を使用することに関し、視覚的な変化を理由とした装飾的な用法であるとする考え方がある¹⁴⁾が、振り仮名では自立語だからこそその用字に限定されており、装飾的なのか疑問がある。

表4 <ケ>字音語

	字体	字音語の用例数	字音語を占める割合	字音語全体に対する字体の割合	
				用例	用例数
月氷音縁 字音語	ㄱ	[28/28]	100%	ケン	15
				ケン	11
				ケツ	1
	け	[19/80]	23.75%	ケイ	5
				ケ	7
				ケ	4
弓張月 字音語	ㄱ	[25/27]	92.59%	ケン	11
				ケン	5
				ケツ	4
	け	[22/104]	21.15%	ケキ	2
				ケ	2
				ケイ	1
八犬伝 字音語	ㄱ	[6/6]	100%	ケン	14
				ケン	2
				ケ	1
	け	[41/150]	27.33%	ケ	1
				ケイ	2
				ケ	1

振り仮名には「^{せまり}迫」「^{より}しり寄」(月氷音縁)、「^{かへり}却て」「^{まもり}瞻」(弓張月)、「^{ひぞまり}潜」「^{かり}獵」(八犬伝)など動詞連用形活用語尾までを振り仮名とする場合があるが、【ㄱ】は用いられない。

③音韻による使い分けのある<ハ>の【ㄷ】【ㄴ】については、/ha/wa/の使い分けがみられた¹⁵⁾。

表6を参照すると、/ha/は【ㄷ】が優勢であり、/ba/には【ㄷ】【ㄴ】のどちらも使用され、「^{すほう}素袍」(月氷音縁)、「^{ほう}袍」「^{ほうおく}茅屋」(弓張月)など/ho/bo/で読まれる<ハ>は作品によって使用する字体が異なる。/wa/には必ず「^{いほく}云」「^{わざはひ}禍」「^{あは}衰」などハ行転呼音の語に【ㄴ】が使われる。

ところで、馬琴は、『朝夷巡島記』第二編巻一序文に「【^かゐ】は上におくの假字。

表5 <リ>字音語

	字体	字音語の用例数	字音語を占める割合	字音語全体に対する字体の割合	
				用例	用例数
月氷音縁 字音語	ㄱ	[10/10]	100%	リヤウ	5
				リウ	1
				リヨ	1
	り	[26/158]	16.45%	リヤク	1
				リヨク	1
				リン	1
弓張月 字音語	ㄱ	[9/9]	100%	リヤウ	13
				リ	7
				リン	3
	り	[8/133]	6.01%	リヨウ	1
				リヨ	1
				リキ	1
八犬伝 字音語	ㄱ	[10/10]	100%	リヤウ	4
				リウ	3
				リヨ	1
	り	[75/245]	30.61%	リン	1
				リ	3
				リヨク	2
八犬伝 字音語	ㄱ	[10/10]	100%	リヤウ	8
				リウ	1
				リン	1
	り	[75/245]	30.61%	リウ	29
				リヤウ	21
				リ	11

【し】は下につくの假字^{かな}。【ㄷ】【ㄴ】も亦これに同じ」と表記規則を述べている。読本の振り仮名の【ㄷ】【ㄴ】を語の位置で分けると、表7ようになる。概ね、【ㄷ】が上(語頭中)に、【ㄴ】が下(語中末)に使用されているが、ハ行転呼音は主に語中末での音韻変化であるから、「上におく」「下につく」ためというより、/wa/と読む<ハ>を書くため必然的に語中末に偏ったとみるべきであろう¹⁶⁾。

使用差が認められない<ス>の【^もす】は、月氷音縁では「^す只管」「^す巳」に、弓張月では「^す住む」といった語が両方の字体で書かれている。八犬伝の唯一の【^すす】用例は「^{きず}疵」であり、「^{きん}野鷄」「^{あす}翌」など他の語末は【^もす】で書かれる。用字としても傾向が窺いにくい。各本によって、書き手の使用方針が異なるとみられる¹⁷⁾。

表6 振り仮名〈ハ〉の音韻

bo	ho	wa	pa	ba	ha		
0	0	0	0	21	60	え[81]	月氷奇縁
0	1	109	0	17	6	ハ[133]	
1	1	0	2	18	81	え[103]	弓張月
0	0	70	0	14	3	ハ[87]	
0	0	0	2	50	138	え[190]	八犬伝
0	0	107	0	14	3	ハ[124]	

表7 振り仮名〈ハ〉語の位置

助詞ハ	助詞ハ	語末	語中	語頭		
0	0	0	21	60	え[81]	月氷奇縁
0	9	26	98	0	ハ[133]	
0	0	4	25	74	え[103]	弓張月
1	0	8	72	6	ハ[87]	
0	0	24	43	123	え[190]	八犬伝
0	1	22	97	4	ハ[124]	

以上、振り仮名の字体の用字をみてきた。〈ス〉以外の変体仮名には、何らかの用法上の区別があったといえる。

4. 振り仮名と本文との比較

今度は、振り仮名と、読本の本文とで、用字にどのような違いがあるのか検討していく。

〈ケ〉は、読本本文では【**ㄹ**】が助動詞「けり」、形容詞已然形「けれ」などに使用が偏り、先行研究で指摘されている通りの使用がなされている。月氷奇縁・八犬伝の本文の助動詞「けり」には【**け**】の使用がある程度みられるが、弓張月にはほとんどの「けり」が【**ㄹ**】で書かれる。弓張月は振り仮名にも「嘲弄」に【**ㄹ**】が使用され、「けり」の文字列への定着¹⁸⁾の度合が強いといえる。

〈シ〉は本文では語頭【**ㄹ**】、語中末【**ㄹ**】の使用傾向である。【**ㄹ**】は主に動詞・補助動詞「す」の連用形「し」に使われ、何らかの語に後接する形で書かれる。したがって本文では単独の語として使われることはない。振り仮名では「手段」(月氷奇縁・十丁オ)などの語頭のほか、「死」(弓張月・廿九丁ウ)のように、単音節で一単語となる語に【**ㄹ**】が使用される。【**ㄹ**】は

あくまで自立語語頭の字体であり、単独では用いられない。

〈ス〉は、本文には【**ㄹ**】【**ㄹ**】が使われ、【**ㄹ**】は使用数が多い汎用の字体、【**ㄹ**】はそれよりも少なめであり、打消しの「ず」など文節末に使われる用字が三本に共通している。これは読本本文のみにみえた使い分けであり、振り仮名に対してルールがはっきりしている。

〈タ〉は月氷奇縁の本文・振り仮名に注目する。本文には【**ㄹ**】48、【**ㄹ**】46が同等に使用され、【**ㄹ**】18も交えて助動詞「たり」や〈タ〉を含む語が様々に書かれている。それに対し、振り仮名では【**ㄹ**】が多く、【**ㄹ**】が少ないという、よくある傾向で使用されている。月氷奇縁の本文は〈タ〉の通用の使用傾向からの逸脱が特徴的であり、一方で振り仮名には通用性を持たせたと分かる。

〈ネ〉はそもそも本文に少なく、打消しの助動詞「ず」の已然形「ね」、「ねがはくは」が主な用例である。

〈ハ〉の【**ㄹ**】【**ㄹ**】が/ha/wa/で使い分けられる点、【**ㄹ**】が「はじめ」など自立語語頭に使用されるといった点は振り仮名と変わらない。ただし、本文には助詞「は」に【**ㄹ**】が使用される。

〈リ〉の【**ㄹ**】をみると、月氷奇縁・弓張月の本文の用例は「はしり」^{きた}「来り」^{やぶ}「破り」(月氷奇縁)、「叱り」^{しか}「帰り」^{かえ}「止り」(弓張月)など、主に動詞連用形活用語尾である。八犬伝は自立語だと「きり」と「ばらりずん」^{のこ}「残りて」3例にのみ【**ㄹ**】が使われる¹⁹⁾。

以上のように、〈ス〉の仮名は本文には字体の用法上の区別があり、振り仮名に対し規則的である。一方で、〈タ〉〈ハ〉

くり」と字体を多めに使い、さまざまに用いるという装飾的な表記が窺える場合が本文にはある。振り仮名は、原則的には一般性が優先されたと分かる。

結論

以上、馬琴読本の振り仮名における変体仮名を中心として、検討してきた。各調査項目の結果として、次のことが明らかになった。

- (1) 振り仮名は、本文に比べ字体の種類が少なく、画数の多い字体、漢字に近い字体はほとんど使用されず、全体に平易化している。ただし、本文における字体を踏まえつつ、振り仮名と言う表記条件に合わせた形での字体の選別・整理が行われたと考えられる。
- (2) 振り仮名は、〈ス〉と〈ネ〉のほかは、概ね使用傾向に共通する部分がある。本文との比較では、振り仮名と本文とで使用傾向が共通している〈シ〉〈リ〉〈ネ〉を含め、振り仮名と本文の使用数・使用傾向は異なると分かった。
- (3) 用字については、〈ス〉以外の仮名には何らかの使い分けが行われており、それらの用字法は、概ね自立語が書かれるときの用法に則している。
- (4) 振り仮名と本文の用字を比べると、本文には変体仮名の用字による装飾性と多様性が認められるが、振り仮名には特定の条件に限っての用字が行われているものが多い。

以上のことから、振り仮名の字体は本文を踏まえつつ整理・選定がなされ、通用の用字にほぼ限られ、平易化されていた。このことから、振り仮名は本文の装飾性からは原則的に離れながらも、本文の

平仮名の文脈に馴染む表記が行われていたといえる。漢字仮名交じり文である読本は漢字主体の文章ではあるが、先述した通り総ルビ状態であり、読解上は本文の平仮名との連続性を考慮されたとみられる。例えば「兵乱」(月氷高緑・八丁オ)のような語の表記は、変体仮名の問題には直接関わらないが、語の意味を伝達する平易さに重点が置かれていると窺われ、読本の本文と振り仮名の文脈的な整合性に配慮した結果とみられるものであり、そのことが仮名における字体の選択・用法にも連動していたと考えられる²⁰⁾。

なお、書形違いの字体、二本に共通した字体、一本のみにみられた字体の用字の検討は残している。また、今回の調査で、音韻と用字の関わりが窺われ、先行研究の用例と合わせ、精査する必要がある。作家・筆耕・彫師の手を経ることで、板本の表記の決定に個々の癖がどの程度影響しているのかという問題もある。いずれも今後の課題としたい。

注

- 1) 「字体」という用語は、樺島忠夫(1979) PP70-74にあるように、字母の違い・くずしの程度による違いを含め、区別できる仮名を指す。一音節に複数の文字がある変体仮名を指す際に、「仮名字体」「平仮名字体」と呼ぶのは文字論において通例になっている。
- 2) 拙稿(2013)(2015)(2016)にて検討を重ねている。
- 3) 拙稿(2013)で、『弓張月』本文・振り仮名、合巻『行平鍋須磨酒宴』の本文の比較を行い、読本本文は合巻より字母の種類数が多く、一方振り仮名は合巻

- よりも字母数が少ないことを明らかにした。
- 4) 本稿では、作品名に引いた傍線部の略称で各資料を示す。
 - 5) 鈴木重三・徳田武編(1996)『馬琴中編 読本集成 第一巻』(汲古書院)影印本。
 - 6) 板坂則子編(1996)『椿説弓張月前編』笠間書院影印本。
 - 7) 国立国会図書館所蔵本(国立国会図書館デジタルコレクション <http://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/2546338?tocOpened=1>)
 - 8) □で囲った〈モ〉の字体は、語末に使われるという点で共通する。書形は異なるが、【𠂔】と共に二種類の字体で各本に使用されるものである。
 - 9) 【セ】【ふ】は、月氷音縁本文には使用されていないが、弓張月本文には使用されている。
 - 10) 拙稿(2015)にて【か】【𠂔】の用法を指摘した。
 - 11) 弓張月と八犬伝に共通する大ぶりの字体【し】は主に語中末に使用されるが、各本の特徴的な表記に属するため、本稿では詳述しない。
 - 12) 【𠂔】が助動詞「けり」、形容詞已然形「けれ」、「けふ」、そして字音語に使用されるという指摘は、内田宗一(1998b)、久保田篤(1998)(2009)、矢野準(1990)による。
 - 13) 【𠂔】が「リヤウ」「リウ」といった表記に用いられることについて、内田宗一(1998a)(1998b)、久保田篤(1996)(1997)(2002)(2009)で黄表紙『金銀先生再寝夢』『無益委記』『大悲千禄本』、洒落本『傾城買二筋道』、滑稽本『浮世風呂』、合巻『修紫田舎源氏』の用例をみると、「りゃ」の表記に使用されることが多いと分かる。また、佐藤麻衣子(2009)にて、振り仮名の拗音「りゃ」や促音を伴う「りっ」には【𠂔】が使われると指摘されている。
 - 14) 久保田篤(1997)(2009)では【𠂔】は視覚的变化を目的とした装飾的用字が行われているという見方である。
 - 15) 〈ハ〉の【え】【ハ】が/ha/wa/の使い分けに用いられていることは近世板本の調査においてほぼ共通している。用字を詳しく検討した研究に、坂梨隆三(1979)が挙げられる。
 - 16) 「上におくの假字」「下につくの假字」の実態がないのかといえば、また一考を要するため、稿を改めたい。
 - 17) 【𠂔】【す】は草双紙によく使用されるが、これまで共通する使用傾向は報告されていない。内田宗一(2000)の合巻『金比羅船利生纜』の板本と稿本での比較調査により、二人の筆耕がそれぞれ清書している箇所、【𠂔】【す】の使用方針がそれぞれ異なると報告されている。
 - 18) 久保田篤(1997)に「【𠂔】の使用が特定の語・箇所に限られるという減少は、古くから見られるようで(中略)慣用的表記が引き継がれたものと見られる」(P85)指摘されている。
 - 19) 読本本文の【𠂔】について拙稿(2015)にて検討している。
 - 20) 倉田静佳(2004)に読本の振り仮名について、「文章表記上、漢字に対してほぼ総ふりがなになっており、本文はふりがなのラインで成り立っている(中略)表記の見かけ上は、漢字が中心で、ふりがなが添えられているが、読

解上はふりがなの方がメインであり、漢字はそれを補佐するもの」(P47)とあり、振り仮名が担う文脈の主体性が指摘されている。

参考文献

- 市地英(2013)「馬琴小説の平仮名字母の研究—読本と合巻の比較—」『成蹊國文』46号
- 市地英(2015)「馬琴読本の平仮名字体—『月氷奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』を資料に—」『成蹊國文』48号
- 市地英(2016)「馬琴読本『月氷奇縁』『椿説弓張月』『南総里見八犬伝』の仮名字体の特徴」『成蹊國文』49号
- 内田宗一(1998a)「黄表紙・洒落本の仮名字体—恋川春町自筆板下本についての比較考察—」『国語文字史の研究四』和泉書院
- 内田宗一(1998b)「『修紫田舎源氏』の仮名字体—作者自筆校本と板本の比較考察—」『待兼山論叢』32号
- 内田宗一(2000)「馬琴作合巻『金毘羅船利生纜』の仮名字体—筆耕による表記の変更をめぐって—」『国語文字史の研究五』和泉書院
- 樺島忠夫(1979)『日本の文字—表記体系を考える—』岩波書店
- 久保田篤(1996)「恋川春町『無益委記』の表記—平仮名の字体について—」『茨城大学文学部紀要(人文学科論集)』29号
- 久保田篤(1997)「『浮世風呂』の平仮名の用字法」『成蹊國文』30号
- 久保田篤(1998)「『金々先生栄花夢』の文字の用法について」『東京大学国語研究室創設百周年記念国語研究論集』汲古書院
- 久保田篤(2002)「江戸時代後期の平仮名・片仮名について」『日本語の文字・表記—研究報告論集—』国立国語研究所
- 久保田篤(2009)「江戸板本の表記の多様性—洒落本『傾城買二筋道』の場合—」『成蹊國文』42号
- 倉田静佳(2004)「馬琴のふりがな—文体・位相との関わり—」『表現研究』80号
- 坂梨隆三(1979)「曾根崎心中の「は」と「わ」—その仮名遣と仮名の字体について—」『茨城大学人文学部紀要(人文学科論集)』12号
- 佐藤麻衣子(2009)「享保期浄瑠璃本の仮名字遣い—『出世握虎稚物語』における「り」「し」「じ」の調査から—」『国文目白』46号
- 前田富祺(1971)「仮名文における文字使用について—変体仮名と漢字使用の実態—」『東北大学教養部紀要』14号
- 矢野準(1990)「一九の文字生活—蔦屋黄表紙五種の仮名表記の実態を中心に—」『近代語研究 第8集 吉田澄夫博士追悼論文集』武蔵野書院

付記

本稿は、第53回表現学会全国大会(平成28年6月5日、帝塚山大学)での研究発表を加筆修正したものです。発表後に賜ったご意見・ご指摘が大変参考になりました。篤く御礼申し上げます。

(共立女子大学)